

送られて来た。十五日には、都の「謀反人」等の様子や静のことを報じた時政の飛脚が鎌倉に着いている。十七日、時政は宗盛の息童二人、越前三位通盛の息一人、それに六代を捕らえ、前三人は梟首した。六代は文覚が猶予を乞うている。二十四日、文覚の弟子が飛脚として鎌倉に到着し、六代を文覚に預ける旨の時政への手紙をもらっている。

宗盛や通盛の子供が殺されたことは源平盛衰記に記されている。静が時政の許に届けられたことや時実のことは『平家物語』には出て来ない。六代について『吾妻鏡』に記されていることは、殆ど『平家物語』に採用されている。しかし、『平家物語』では文覚本人が鎌倉に下って説得することになっているし、『平家物語』の描く、時政の六代や斎藤兄弟への芳情は『吾妻鏡』には出て来ない。

文治二年四月八日、静が「しつやしつ」の歌をうたったことに頼朝が腹を立てた時、政子は、時政が「怖時宜 潜被引籠之」た時のことを述べて、頼朝を宥めた。

延慶本・源平盛衰記・源平闘諍録では、兼隆に嫁がせる約束をし、実際、兼隆の許に遣したことになる。『吾妻鏡』は、時政の心を暴いているが、兼隆のことは出て来ない。

三

北条時政について、『平家物語』と『吾妻鏡』がどのように描いているかを、右に見て来た。

『平家物語』諸本では、頼朝の雌伏期、旗揚げを詳しく描いている非当道系諸本に、時政も登場することが多い。それらの本では、力のこもった、説得力のある弁舌をもった者として、時政を描き出す傾向がある。非当道系諸本のうち、源平盛衰記は、特定の人に焦点をあてて、その人をその場面で語るといった集約の方法を用いたり、『吾

妻鏡』と比べてみた時、くい違いが多く目についたり、延慶本・長門本に比べて物語化の傾向が著しい。

しかし、『平家物語』諸本を通して、時政は、頼朝の第一の側近、情ある武将として、好意的に描かれていると言える。

筆者は、源氏の世が三代で終わることを、『平家物語』は何か理由付けて描き込んではいないかと考えてみたが、北条氏については、この好意の中に、執権として天下を握ることが暗示されているように思うのである。

(注一) 特に出典の記されていない引用部は、当道系諸本では屋代本からの、非当道系諸本では延慶本からのそれである。

(注二) この点は『平家物語研究事典』(昭和五三年三月)の「時政」の項(矢代和夫氏担当)に指摘がある。

(注三) 「『平家物語』の描く源頼朝像——平清盛、重盛との比較から——」(『人文』平成四年八月)。

(平成四年九月一日受理)

向かおうとする。ところが、その途中で、宮根山の別当行実兄弟に会う。時政は、はぐらかそうとしたが、行実の信頼の程が分かると、ひきかえして、頼朝の所に案内する。その後、時政は、甲斐の源氏を集めて来ようと再び分かれるが、再度引き返し、頼朝に合流する。二十七日、時政達は安房に向かい、海上で三浦一族と出会う。二十九日、頼朝が到着し、時政達は安堵する。九月八日、時政はやつと甲斐へ赴く。そして、十五日、武田太郎信義・一条次郎忠頼等に会い、十月十八日、二万騎を率いて、黄瀬河に布陣していた頼朝の許に駆け付ける。

右のうち『平家物語』と共通しているのは、時政が甲斐へ向かったことだけである（但し、四本で）。延慶本・長門本・源平盛衰記は、杉山で頼朝の命令で分かれるところで切っている。七騎落ちになぞられたことが記されているが、延慶本・長門本では時政父子はいらず、七騎の釣り合いが取れていない。七騎落ちの話だけを記す四部合戦状本は時政父子を七騎に加えている。又、源平盛衰記では、時政が甲斐へ向かった目的が全く記されていないので、只落ち延びただけのように見える。猶、延慶本・長門本・源平盛衰記は、『吾妻鏡』に記されていない時政の言葉戦いを大きく描き出している。これは、頼朝軍の副将であり、「其舌弁有」と紹介された（但し、長門本にはない）時政に相応しい場面、姿であると評せよう。

『吾妻鏡』に戻ると、十月二十三日、相模国府で初めて頼朝による「勲功賞」が行われ、時政はその「安堵本領」「浴新恩」を受けた者の筆頭に記されている。十二月十二日頼朝の新邸移りの式に時政父子が供奉した。十四日、時政は実平と武蔵国の「知行地主職」についての裁定を行っている。治承五年正月六日、三郎宗時を害した平井紀六が時政の前に連れて来られた。翌養和元年正月三日、時政は頼朝の「行始」の渡御に従った。三月十五日、鶴岡社参道の普請に自ら土石を運んだ。四月五日、頼朝の江島行に従った。十一月十四日、牧三郎宗親

への頼朝の「勘發」を憤って、時政は伊豆国に下った。寿永三年三月一日、時政は土佐国の者へ平家追討を命じる書簡の奉行を勤めた。十二月三日には、手紙を義経に送って、園城寺のことを頼んでいる。元暦二年四月二十日には、頼朝が三島社に寄進した田地の配分を時政が奉行している。五月十五日、義経に連れられて下つて来た宗盛父子を酒匂の宿で受け取ったのは時政であった。六月七日、頼朝と宗盛の対面の席には時政も出席している。八月二十四日、下河辺庄司行平を迎えての酒宴に列席している。

以上の『吾妻鏡』の記事は『平家物語』に全く採られていない。鎌倉方の内輪のことが多く、流石に『平家物語』には向かないなと思われるが、一、二使つても宜さそうなものがない訳ではない。宗盛の受け取りの役は、南都本や当道系諸本の中院本などは、梶原氏として出している。南都本・中院本が時政と景時を対照させていることは前述したが、これらの諸本はこの受け取りの役は時政に相応しくないと判断したのであろうか。

文治元年十一月二十五日、時政の入京が『吾妻鏡』に記されている。同日、行家・義経を「尋索」すべき旨が宣下された。二十八日、時政は守護・地頭の設置などを吉田中納言経房に伝え、翌日、勅許を得た。十二月六日には、行家・義仲と共に行動した六人を申し請けるよう頼朝の命を受けている。

ここでは六日の件を除いて全て、『平家物語』諸本に採用されている。但し、守護・地頭の設置等についての法皇の反応は『吾妻鏡』には全く記されていない。又、源平盛衰記では時政が演説して法皇達を動かすことになっているが、これも源平盛衰記の「其舌弁有」時政という線で作られたもののようなだ。

十二月一日、頼朝から「平氏一族相漏誅戮配流二罪之輩」と前中將時実を捕縛するよう命令が発せられている。八日には静が時政の許に

鎌倉本・覚一本では、編著者の評として、最後に「誠に情ふかりけり」（覚一本）という評が加えられている。

以上が、六代助命に関する部分であるが、時政は結局、どの本でも情深い武将として描かれていると言えよう。また、文覚がよく知って居り、斎藤兄弟が特に情をかけられている処も、興味深い。

二

『吾妻鏡』に時政が初めて登場するのは、治承四（一一八〇）年四月二十七日、高倉宮以仁王の令旨が届いた日である。時政は「當國豪傑」「以武衛爲聲君 專顯無二忠節」と紹介され、令旨を披く役を勤めている。ここに『吾妻鏡』が描き出したのは頼朝の腹心という位置にある時政の姿である。

右のことは『平家物語』には採りあげられていない。そもそも『平家物語』は、以仁王の令旨よりも後白河法皇の院宣を、頼朝の旗揚げの契機として描くという立場をとっている。しかし、その院宣が届いた場面でも、時政は延慶本・長門本で、頼朝から蹶起の相談を受けるという主要な役を演じさせられているが、院宣の披見というようなことは出て来ない。

八月上旬、兼隆を先ず誅殺しようと決意した頼朝は、「洛陽放遊客」邦通に山木郷の図絵を作らせる。そして、四日、時政とその図絵の中に置いて軍略を練っている。六日、頼朝は勇士二人一人に「慇懃御詞」をかけて、彼等に懸命の働きを約束させた。しかし、このことが何の為なのかは時政以外には漏らさなかった。

この部分も、時政が頼朝にとって唯一、絶対的な相談相手だったことを語っている。時政と図絵を中にして、兼隆誅殺の計を練ったことは『平家物語』に出て来ないが、延慶本・長門本・源平盛衰記では、

平家を倒す策を時政が示した事になっている。このことは、これら三本の時政が、大きな源平の戦いという『平家物語』の視点に相應しく作りかえられていることを浮き彫りにしている。しかも、延慶本・源平盛衰記では、先に記したように、ここで時政の戦略的確だったことと、時政・頼朝の一身団体ともいべき信頼関係を称えるのである。『吾妻鏡』とこれらの諸本は、ここでは見ている世界を異にし、延慶本・源平盛衰記の方が遙かに明確に、時政称賛の姿勢を見せている。

同月九日からは秀義からの知らせ関係の記事が出て来る。時政のことについては、延慶本・長門本・源平盛衰記と変わらない。四部合戦状本の記事は、景親が上京していた時の話という部分が全くなく、史実から離れた内容になっている様だ。

十七日、兼隆を討っている。この時、時政は出発前、閑路をとる案を出したが、頼朝に退けられている。出立後、肥田原では佐々木兄弟に「權守信遠」を討つようすすめている。

『吾妻鏡』の記事のうち、どの道をとるかについての討議は『平家物語』には記されていない。肥田原の件は延慶本・長門本に同内容の記事がある。一方、延慶本・長門本・源平盛衰記は『吾妻鏡』に記されていない、景簾が山木に着いた時の時政達の様子と、時政からの進状を記している。これらのことは、この三本が景簾の武勇談らしいものを採用する一方で、時政を重視していたことを物語っている。更に、源平盛衰記は、時政が館に火がつけば味方の勝利と言って立つなど、『吾妻鏡』の記事を作りかえて、時政を押し出している。

二十日から石橋山の合戦の記事が始まる。時政は、先ず頼朝に従う武将の筆頭に挙げられている。二十四日、時政父子は頼朝をのばす為に、景親達と戦った。その後、時政は皆に頼朝を捜させる。頼朝を尋ねあてたものの、命によって別れることになった時政父子は、甲斐に

免給事」の部分に這入る。

時政が六代の居所についての密告を受けるのは、探し始めたところとする延慶本・四部合戦状本・南都本と、手段を尽くしたが聞き付けの事が出来なくて、遂にいよいよ下向という時になって、と劇的に設定する長門本・源平盛衰記や当道系諸本とに分かれる。

郎等を遣して、所在を確かめた時政は自ら出向いて、六代に同道を求め、促す。延慶本・源平盛衰記・四部合戦状本・竹柏園本・鎌倉本・覚一本は悲嘆に暮れる一家の人々に同情して涙を流す時政を描き出す〔東寺執行本・八坂本も「子共余多有りケレハ哀レニソ思ヒケル」（東寺執行本）と類似の心情を描いている〕。時政は強引に押し入ることもせず、待っている。暮れ方、やっと観念して出された六代を連れて、時政は六波羅へ向かう。この間、両足院本を除く諸本は、徒跣で六代の車に蹤いて走る斎藤兄弟に、時政が乗替をすすめたことを記している。

さて、その後、六代の乳母が文覚に助命を乞う。文覚は、六代を捕らえたのが時政だと知ると、「北条ナラハ安キ事コサムナレ」と言つて〔南都本・屋代本・小城本・百二十句本・東寺執行本・中院本・八坂本では「知ラヌ人カト思ヒツルニ」（南都本）といった表現である。長門本・源平盛衰記・四部合戦状本・竹柏園本・鎌倉本・両足院本・覚一本には文覚の特別な反応は示されていない〕、頼んでみようとする。

文覚が訪ねてみると、時政は六代が「ナノメナラス良形モウツクシク心サマワリナク糸惜」（小城本・百二十句本・八坂本は「余り痛サニ」（小城本）とだけある）ので、そのまま処置出来ずにいた。文覚に会うと、六代も斎藤兄弟も涙を流す。延慶本・源平盛衰記・四部合戦状本では、時政も貰い泣きをすることになっている。又、南都本・東寺執行本・中院本では、文覚が頼朝の許しを得て来る為に、二十日

の猶予を乞うと、時政は「余ニ糸惜思奉レハ待コソ奉ラメ ハヤトウ〈」（南都本）と勧めることになっている（「子細ニヤ及候」と快諾する両足院本の時政もこれに近そうだ）。

ところが、二十日過ぎても文覚からの使者さえない。しかたなく、時政は六代を伴って、鎌倉へ下る。が、それでも便りはなく、時政は遂に、駿河の千本松原で六代を処刑することにする。延慶本・源平盛衰記・四部合戦状本は、下向に当たって、時政達が涙を流している旨を斎藤兄弟に報告させる等、時政の六代への愛惜の涙を最も多く記している。これらに対し、長門本・竹柏園本・鎌倉本・八坂本・覚一本では千本松原で、涙ながらに処刑する旨を六代に告げることになっている。南都本・中院本は健気な六代の言葉に涙をこぼすのだが、東寺執行本・両足院本では六代主従が泣き沈んでいるのを見て涙を流すだけである。又、屋代本・小城本・百二十句本では、この間時政の涙は全く記されず、処刑を進めない「太刀取」に「遅シト目ヲ合セ」る時政が描かれている。

危機一髪というか、切り手がなくて時政も進退極まったというか、そのような時、文覚が到着する。時政は頼朝の赦免状を開いて（延慶応本・長門本は「急キ」という表現を入れる）、感嘆して打ち置く。源平盛衰記・両足院本は喜ぶ時政の姿を記し、南都本は時政も「悦泣」したと述べる。

別れに当たって、時政は斎藤兄弟に馬を贈る。長門本・源平盛衰記・四部合戦状本・南都本・東寺執行本・中院本では、斎藤兄弟が時政に「ひころのなさけありかたくあたりつる事」（長門本）を述べる。延慶本・屋代本・小城本・百二十句本では、時政の「日来ノ情」が今更感じられて、涙を流したとなっている。これらに対して、両足院本・八坂本では、六代が「各々ノ情深フ當リ給ヘルコソ何ツノ世マテモ難忘候へ」（両足院本）と述べることになっている。更に、竹柏園本・

軍の名前等は一切出て来ない)。ところが、南都本・東寺執行本・中院本・両足院本・八坂本では、範頼が討たれた後、土佐房昌俊が小勢で上り、暗殺しようとしたが失敗し、その後、時政が大軍勢を率いて上洛することになっている(南都本・中院本では、昌俊を遣す案は梶原平三景時に、時政の上洛は時政と、頼朝の相談相手を違えている)。又、源平盛衰記では、頼朝が範頼に不安を抱いて再検討にはいり、時政と土肥次郎実平が上洛するように評定された(範頼は未だ討たれず、彼の起請文が受け入れられなかったことが記されるだけである)となっている。時政が上洛した時、義経の姿は既に都にはなかった。時政の上洛に合わせて、義経、行家等追討の院宣が発せられる(長門本、南都本、並びに竹柏園本・鎌倉本・八坂本を除く当道系諸本では上洛当日(竹柏園本・鎌倉本では上洛の翌日、八坂本は上洛の日が不明)、延慶本・四部合戦状本では前日だが「頼朝力依申」となっている。又、源平盛衰記では十六日も前に「恐、頼朝威勢」で院宣を発したことになる)。上洛した時政は後白河上皇に、頼朝からの、守護・地頭を置くことと兵糧米を徴収することの要求を言上し、許しを得る(長門本は兵糧米のことを「十一町に一町の給田を給る」と表現する。又、東寺執行本・両足院本には兵糧米への言及がない。一方、屋代本・小城本・百二十句本は、そこを「文治元年十一月二十日源二位頼朝卿ヲ日本ノ大将兼惣地頭ニ被補」と表現している)。この間、源平盛衰記では、「頼朝申状すこふるくわふんなり」と法皇も公卿も思い、許可をためらっていたところ、時政が清盛程の謀叛人は「むかしもたくひをきかす 向後も実にありかたき」と説くので、「當時の感應におそれ」許可を出すということになっている。

場面をここで一度区切ることにする。

大軍を率いて上洛する時政は、頼朝にとって兄弟以上に信頼出来る、忠実な人物ということになる。守護・地頭の設置申請も、時政は頼朝

の影となって、その役を果たしたようだ。諸本では、南都本・中院本は、時政を景時に対照して描き出そうとしている。源平盛衰記は、朝廷が頼朝に威圧されて、やりたくないことをさせられて行く様を他本以上に強調して描いている。時政と実平が大將軍を務めるというのも、時政の演説などがあって、別に彼を全体として下げようとしているとは見えないので、実平を押し出した逸話、資料を取り込んだものであろうか。

『平家物語』に戻ると、上洛した時政の手によって平家狩りが行われる。時政が、平家の子孫を探し出した者には勲賞を与えると触れを出したことは諸本に記されている。そして、これを契機として目に余る平家狩りが行われたことも諸本に共通するのであるが、これと時政との関わりには以下のような異同がある。延慶本・源平盛衰記・四部合戦状本・屋代本では、時政の平家狩りは頼朝の厳命を受けてなされたとされ、その目に余る悲惨さを記した後、それを執行した時政について「世に随へハ不力及」といった、彼の立場への理解等が記されている。一方、南都本・小城本・百二十句本・東寺執行本・中院本・八坂本は前者、時政の平家狩りが頼朝に命じられてなされたものであることを記すだけで、その悲惨な描写から六代御前の話へと流れて行っている。また、竹柏園本・鎌倉本・両足院本・覚一本は、平家の子孫を探し出す為に、勲賞を付ける御触れを出したのは時政の計略だった(頼朝の命令を記さない)様に描くが、後者、「世に随へハ不力及」という表現を残して、時政への理解は示している。以上の諸本には、時政が止むを得ず残酷な平家狩りを行った様な表現が見られるけれども、長門本だけは、頼朝の命令も時政の立場を弁護したような表現もない。但し、長門本が残酷な時政を描こうとしたのかどうかは詳にしない。

いよいよ時政登場の最後、「六代御前被召取事」から「六代御前被

一胤事」の章段の中に、

盛基美濃守 其子貞時兵衛大夫 其子時家嫁 北条介娘 設 時色
四郎大夫 其子時政北条四郎号 遠江守 為 右大将頼朝男也 其
子義時奥州守云右京権大夫 彼義時打隨都 知行日本国

という系譜を記している。時政については、頼朝の男という以上の記載はない。そして、その子の義時に、「打隨都 知行日本国」ということが記されている。ここに見られる時政の位置は、義時が天下人となるのを準備したことに止まる。それは、頼朝の「心ニ深く思キサス事」を描くところに、源平闘諍録が記す「可然果報」「北条可繁昌奇瑞」という言葉に遙かに対応しているようだ。

次に、これもこの節の始め、時政が登場する場面を挙げた所に記さなかった箇所であるが、延慶本では「第三末」「兵衛佐与木曾不和ニ成事」の章段にも時政が登場する。

行家が義仲を頼つて、頼朝の許から去ったので、頼朝は義仲を恐れ、攻撃しようという思いが萌していた。そこに武田五郎信光が、義仲は平家の聲になって、頼朝を討とうとしていると告げたので、頼朝は義仲征伐の軍を起こすことになった。これに対し、義仲は越後国境の関山に陣を取ったが、「當時ハ兵衛佐ト敵對スルニ及ハス」と言つて、引き退く気配を見せた。頼朝も引く者を追つて討とうという気はないが、使者を立てて、義仲の返事を聞こうと思う。そこで、頼朝は「頼朝カ云ワム詞スコシモ違ハス木曾ニ云ツヘカラム使者」として誰がいるか、時政に相談するのである。

ここに描かれている時政も頼朝の相談相手、頼朝の意を受けて最適任者を推薦する役である。時政の推薦した天野藤内遠景が「面モフラス コシモヲトサス 兵衛佐ノ詞ノ上ニヲノレカ詞サシクワヘテ詳ニソ云タリケル」というだから、頼朝の意は十分に遂げられたと見るべきものである。延慶本・長門本は時政を頼朝の第一の相談相手とし

て描いていると前にも指摘したが、延慶本、長門本の間でも、そのような時政を積極的に描き出しているのは延慶本の方ということになる。

更に延慶本は「第六本」「八嶋ニ押寄合戦スル事」の章段にも、佐藤三郎兵衛継信の戦死に続いて、「サルホトニ勝浦ニテ戦ツル源氏ノ軍兵共ヲクレハセニ駆テ追付タリ」として、「足利藏人義兼 北条四郎時政 武田兵衛有義」と、義兼に続けて、時政の名を挙げている。しかし、右に引用した三人は「判官為平家追討西國へ下事」の章段を見ると、「参川守範頼ハ神崎へ向テ長門國へ渡ラントス 相従フ軍ハ足利藏人義兼 北条小四郎義時 武田兵衛有義」とあって、義経ではなくて、範頼に従っていたことになっている。又、「四郎時政」ではなくて、「小四郎義時」である。これまで見て来た延慶本の名前の記し方からすれば、時政を義兼の後に挙げるということは有り得ない。従つて、ここは「小四郎」であつたところを、編著者（現存本の形にした者と言うべきか）が勘違いして時政と記してしまったと見るべきである。しかも、この編著者（か？）は、義時・時政の勘違いに止らず、義経に従っていない武將を馳せ加えさせる、という誤りまで犯しているのである。このことは、現延慶本が数人の手ではばらばらに編集されたか、余り全体をよく読んでいない者の手によって追加、挿入されたか、現存本の作品としての完成度を疑わせるものである。

二回目に、『平家物語』諸本に共通して時政が登場するのは、彼の上洛の場面以下である。しかし、そこには以下のような異同もある。

義経追討の大將軍として当初名前が挙げられたのは三川守範頼であつたが、彼は頼朝に疑われ、討たれることになる。延慶本・長門本・四部合戦状本・屋代本・竹柏園本・鎌倉本・小城本・百二十句本・覚一本では、その後、時政が大將軍に任じられる（但し、屋代本・小城本・百二十句本には範頼が討たれてしまった後にということを明確に示す語がない。又、四部合戦状本では、時政の上洛まで代わりの大將

参照)。延慶本・長門本は時政が、頼朝挙兵時の第一の相談相手、作戦等の中心人物であったことをどの本よりも詳しく描き出していると前に記したが、この点もそれに通じるものと言えよう。

以上が、延慶本・長門本・源平盛衰記・四部合戦状本に見られる、頼朝挙兵譚の中の時政である。ところが、延慶本・源平盛衰記・源平闘諍録には、頼朝が院宣を手にする前に、彼の「心ニ深ク思キサス事」があつたことを記す章段が配されている。そして、そこにも時政が登場するのである。次に、その時政を追ってみることにしよう。

「源平闘諍録によれば、嘉応元（一一六九）年八月十七日の夜半ばかりとのこと」伊東入道助親の許から逃れた頼朝は、新たに時政を頼ることになる。ところが、時政が上京している間に頼朝は、助親の許でと同じように、時政の娘と親しくなってしまう（源平闘諍録は、同年十一月下旬の頃とする）。帰郷の途中でこのことを知った時政は大いに驚き（源平闘諍録は「歎恐、平家威故」という表現を付け加えている）、同道していた兼隆に娘を嫁がせる約束をする。そして、家に着くや否や、娘を兼隆の許に遣す（源平闘諍録は、十二月二日のこととし、「取還於娘」という表現を加えている）。ところが、娘は兼隆の許を逃げ出して、伊豆の山に這入りこんでしまう。しかも、その旨を頼朝に告げたので、頼朝が駆けつけ、一緒に伊豆の山に籠ってしまふ（源平盛衰記では、伊豆の山にいた頼朝の許に駆けつけることになっている）。

ここまでは三本とも相似た内容だが、以下は、延慶本・源平盛衰記と源平闘諍録とでかなり内容を異にする

先ず、前者から見て行く。時政もこのことには腹をたてたのであつたが、伊豆の山には手出しは出来なかった。時政は、世間を憚って兼隆を諍にはとつたが、頼朝の「心ノ勢ヒ」を見たので、「心ノ中ニハ深ク憑」むようになった。頼朝も時政を「賢キ者ニテ謀アル者」と見、

「大事ヲ成ンスル事時政ナラテハ其人ナシ」と思ったので、表面的には恨んでいる様子を見せたが、心中に背く気持ちではなかった。以上が、延慶本・源平盛衰記の内容である。

後者、源平闘諍録の内容は次のようになっている。娘が兼隆の許を逃げ出し、伊豆の山で頼朝と一緒にしたことを聞いた時政は、娘を勘当する。しかし、そのうち時政は、「可然果報」か、次第に心も和んで行き、娘の勘当を解き、夫婦を北条に呼び寄せる。やがて、頼朝夫婦には吉祥天女の様な女の児が生まれる。その後、ある時、「小間酒盛次」頼朝と時政が連歌を連ねたのであつた。この連歌を聞いた人は、「北条可繁昌奇瑞也」といって、謳歌した。

延慶本・源平盛衰記では、時政が、世間の目を欺く為に頼朝に対立するような行動を取っていたというのが印象的だ。言うまでもなく、これは、未だ大番役に駆り出される程度の小豪族に過ぎなかった当時の北条氏の保身の技であらう。しかし、その時政の心の奥を頼朝が見抜いて、「賢キ者ニテ謀アル者」として信頼していたのである。

延慶本・源平盛衰記は、頼朝の「心ノ勢ヒ」に惹かれた時政と、互いの心中を察して成立する稀有の信頼関係を描いて見せたのである。

延慶本・源平盛衰記が時政の表面と内面を区別するのに対して、源平闘諍録は殆んど人の心中に触れることがなく、外面的な叙述に徹している。従って、娘の勘当を解いたのは、時政の心が和やかになったからで、彼が一芝居をうっていた訳ではない。源平闘諍録は、その心が和やかになったことを「可然果報」と捉えるのである。編著者には、それを機に時政が北条氏の繁栄を手にしたことになったように見えたのであろう。編著者は、北条氏の繁栄の源に注目した結果、超自然的なものの力を見出したというところであらうか。

右が、頼朝の「心ニ深ク思キサス事」に関して描かれた時政である。更に、以上の外に、源平闘諍録は、「巻第一上」「自桓武天皇平家之

の展開になったことを付け加える。「得其人、則其國以興」失其國則其國以亡」という文言も引いて、延慶本・源平盛衰記は、時政の的確な判断や説得力と、時政・頼朝の「合躰 同心シ」たことが「天下遂平定」海内永一統セリ」と、時政を源氏の世を齎した第一の功労者として、早ばやと称えるのである。

さて、頼朝が時政に相談しながら、決行の時期を窺っているうちに、佐々木三郎秀義から清盛に頼朝の動きが密告されているという旨の知らせが届く。この記事は先の四本に共通している。四部合戦状本は記事が簡略で、時政の名も出て来ないが、残りの三本では時政が主謀して「謀叛」を計画していると長田入道が上総守忠清に伝えたことになっている。

八幡神社の放生会が終わり、頼朝は和泉判官兼隆の襲撃を決行する。

この記事も一応四本共にもつが、四部合戦状本は「其夜被^レ誅兼隆承^レ」とだけあって、時政も外の誰も名前さえ記されていない。延慶本・長門本・源平盛衰記では、時政はこの襲撃隊の中心人物で、出立の名寄せの一番にその名が記され、兼隆を加藤次景簾が討ち取った後、時政からの注進状が届けられるという記事まで加えられている。『平家物語』の中で北条一党の者の戦い振りが記される殆んど唯一の箇所だが、手強い抵抗を受けて攻めあぐねているという様子で、特にこれという手柄はない。源平盛衰記は、景簾を詳しく描いて行くが、時政は景簾の働きを我が事のように喜んでいて、彼自身にはこれという戦功はないけれども、大将格の扱いで、別に悪くない。一方、延慶本・長門本は肥田原で佐々木一族に権守兼行を先ず討つように指示する時政を描いて、案内者、指揮者としての姿を最も強く描き出している。これら二本は、兼隆を討った後でも、以後の方策について相談を受けた者の筆頭に時政を置き、引き続き（頼朝の側近は増えたが）時政が相談相手の首席であることを示している。

石橋山の戦いで時政は、頼朝方の大将として景親の挑みに応じ、激しく言葉戦を戦わせる。四部合戦状本はここも「兵衛佐負^レ石橋軍込^レ山」と、極めて素っ気ない。院宣を手にしてからここまでの間、四部合戦状本が記しているのは院宣のこと、秀義からの知らせ、頼朝の言動の三つである。旗揚げにあたって時政が果たした役割・功績（他三本の描いている）といったものは完全に抜け落ちている。これは、当道系本のように旗揚げ説話を省略しようと試みた為にこのようになったのだという解釈も出来よう。しかし、秀義からの使者は記されている点を見ると、どうも頼朝の旗揚げの経緯の捉え方が異なるようだ。

話を戻すが、言葉戦は三本とも相似た内容を戦わせながら推移して行くけれども、延慶本・長門本が「恩コソ主ヨ」と言い放つ景親の言葉で打ち切るのに対し、源平盛衰記は、その景親の言葉に「欲は身を失^レ」という「道理」を浴びせかけて、笑いものにしたことを付け加えている。このことは、この場面では延慶本・長門本よりも源平盛衰記が時政の鮮やかな弁舌振りを描き出していると言いうことになる。頼朝拳兵譚の他の箇所では、源平盛衰記に時政称揚の姿勢がそう強いとは認められない。とすれば、源平盛衰記は、集中・集約という叙述法を（当道系諸本並に）用いていると解釈した方が宜さそうである。他本との比較もその点を勘定に入れねばなるまい。

石橋山の戦い敗れて、頼朝と共に山に逃げ込んだ時政は、「各是ヨリ散^レニナルヘシ」という頼朝の言葉に従って、子息義時と一緒に甲斐國に向かう。このことは四本に共通している。延慶本・長門本は、その後、「土屋三郎与小二郎行合事」の章段の冒頭に、「北条四郎時政ハ甲斐國へ趣 一条 武田 小笠原 安田 坂桓 曾称禪師 那古藏人 此人^レニ告ケル」ということを記している。これは、時政が単に甲斐國へ逃げたというのではなく、甲斐國で捲土重来を期して、豪族への働きかけを行ったことを語るものである（後述『吾妻鏡』

『平家物語』に描かれた北条氏

橋 口 晋 作

鎌倉時代、源頼朝の没後、次第に権力を強めて行き、ついに執権として長く時代を支配することになる北条氏は『平家物語』にどう描かれているのであろうか。殆んどこれまで取り上げられていない問題であるが、しかし、『平家物語』が鎌倉時代に成立し、発達を遂げた作品であることからすれば、このことは打ち捨てては置けない問題——『平家物語』の主要な論点であるかは別問題だが——に違いないと思う。

『平家物語』に登場する北条家の人は、初代執権北条四郎時政、その子三郎宗時、第二代執権四郎義時、時政の娘（政子）、甥平六時定の五人である。しかし、時政以外の宗時・義時・政子・時定は『平家物語』では全くの端役に過ぎず、その行動が特定の箇所で記されるだけである。従って本稿では、時政の記述を追うことに絞り、他の四人については特に言及の場を設けないこととした。今回も『平家物語』の主要な諸本を見わたしながら、考察を進めて行きたいと思う。又、『平家物語』諸本の描く時政像の傾向、特徴を窺うために、『吾妻鏡』に出て来る時政について、節を改めて見て行くことにする。『吾妻鏡』は諸資料を編纂して成ったものであり、特に『平家物語』に描かれる幕府創設期は後になって纏められたものであろうが、他に適当な資料もないのでやむを得ず使用する次第である。

一

時政が『平家物語』で描かれるのは、頼朝の挙兵に当たって中心と

『平家物語』に描かれた北条氏（橋口）

なって働いたこと、時政の上洛、平家の嫡流六代御前の逮捕と助命の場面等である。

頼朝の挙兵時で、『平家物語』諸本に共通しているのは、「伊豆國流人前右兵衛佐頼朝謀叛之由大庭三郎景親早馬京着事」の句で、景親から、頼朝に遣されて和泉判官兼隆を討ったことが告げられていることと、頼朝の謀叛を聞いた畠山庄司重能（大番役で、当時上京していた）が彼については、親族になっているので頼朝の味方をするかもしれないと述べていることとの僅か二箇条である。この二箇条は時政が頼朝に最も近く、謀叛の第一の協力者であったことを伝えるものである。

諸本に共通して記されているのは右の二箇条であるが、延慶本・長門本・源平盛衰記・四部合戦状本には、頼朝が後白河上皇の院宣を手にしたところから、関八州を平定して新三位中将維盛を大將軍とする平家の遠征軍を迎え撃つ態勢をとるまでの経緯が詳しく記されていて、その関係で時政の登場することも多い。次に、四本で記事の出入りもあり、やや繁雑になるが、この挙兵譚での時政の描かれ方を見て行くことにしよう。

院宣を手にした頼朝は、延慶本・長門本・源平盛衰記では時政に相談して、追討の旗揚げを思い立つ。この間、源平盛衰記では、進退をためらった頼朝が伊豆の聞性坊に相談し、聞性坊から急ぎ思い立つようにという返事を得た旨を記す。従って、源平盛衰記の時政は頼朝の軍事面での相談相手という印象が強いが、延慶本・長門本の場合も各豪族の動き、天下取りの策を論じる時政の言葉は共通しているので、軍事面が中心ということは動かないようだ（但し、延慶本・長門本では、他に頼朝の相談相手が登場しないので、彼の動きの一切についての相談相手だったと見える）。三本の中でも、延慶本・源平盛衰記は時政の返事を「其言実アテ其舌弁有」と評し、かつ、時政の言葉通り